

遠近新聞  
第六號



定價一匁

西垣文庫  
文庫 10  
7265  
4



特 文庫10  
7265  
4

西垣文庫

5715

遠近新聞第六号

慶應四年閏四月廿三日

閏四月十五日別紙の通に 仰渡以旨田安殿に  
仰渡段筑前守殿より達来

朝廷寛典の 所處置を以て徳川家名に下之旨上下  
一同在在に旨先達て茲為達置に然る処其前後猶脱  
走の者共有之近日諸所屯集暴議相立に段全徳川家  
名又付疑念相抱に右の所業より至りて裁前件の  
始末にて主人□□恭順一途の素志より相戻自然  
結局の 所處置も所延緩又相成り上下一同安堵也

遠近新聞

第六号

廿七

至り兼可しの旨し向後愈い以恭順心得違無之し松末し迄  
驚おどし中諭謹慎しんの實行し十目同視しの上し家名しの勿論相  
續つ知行高等速しの定裁可有之間聊し不抱疑念各箇恭  
順し可し在し以松大撫督宮 山沙汰し以事

同四月

東海道鎮撫府

撫督印

○辰三月廿日於辦事局山渡書の写

徳川□□の處置の儀 朝廷よりハ諸事ハ寛容しニ  
思召 山沙汰し 仰出し以処旧冬鎮定を名として  
下坂の上軍配し及し以次第始末言行相違正月三日以

分付大義名  
致一以未私  
文通ホシ義

来の奉勅叛逆顯然其罪天下万民の共し又知し処し以  
故不し為得止大号令しハ發表終し 山親征し 仰出  
勤 王の諸藩私情を捨て公議し又基し諸兵大撫督し  
附屬し已し賊城し又相臨し以折柄恭順謝罪の道実効し  
更し又無し之尚先供の行違等口実と致し一停軍相願し以次  
弟 朝廷を奉輕蔑の處置しく不届しの至し以天下後  
世ハ對し一決し以許容難し為在義し又有し之仮し以許容し  
為在し以ても亦前条暴入の轍し又出し裁しも難計し以条理  
上しハ勿論彼の情実万し採し用難相成却して人心の疑  
惑を生し以てハ此しハ場合不し容易義し於有し之ハ逆賊し又

遠近新聞

廿八

均しき筋より間屹度 水沙汰可有之事

○ 閏四月 於京都 水達書の写

先般 水誠誓の旨より 茲為基此度 還水の上ハ 思  
食を以不日ニ二条城ハ 玉座を 茲為移万機親敷  
引召猶 水餘暇を以文武水講究をも 茲為遊水旨  
仰出より 付弥以 公卿列藩士民ニ至る 可  
勉勵 水沙汰水事

閏四月

此度大総督官より言上の趣も有之徳川□□降伏謝

罪奉仰 天裁より 付てハ非常至仁の 獻慮を以て  
寛典の由處置可也 仰出依之来る 七日 還幸 茲為  
在 旨 仰出 水事

閏四月

向後治乱も 時機より 依て四方ハ 行幸可也 遊水由  
美可有之 水付供奉水列の美も三等より 茲為立追て  
仰出 殊ニ 近來国家多事小民夫役ニ 苦水段連  
り 達 天聽歎 思召 水民力を省るハ 国家の急  
務ニ 付右三等中水手當ハ 可成丈 第一水簡便ニ 水  
随 遊水段 仰出 水付 獻慮の旨厚ニ 可相

閏四月

近來は

心得 山沙汰の事

閏四月

此度 山親征海軍 天覽を為遊時機に依り東海道  
 へ大旂を為進以 思召以処大総督宮より関東の  
 形勢言上の趣も有之暫く浪花に 山滞在を為遊以  
 然る処此度徳川□□恭順謝罪奉仰 天裁以付て  
 不可赦の大罪嚴譴至當以得共祖先の勲勞不為  
 為捨非常至仁の 敬慮を以寛典の処置に 仰出  
 以依てハ兼て山布令の通達に 還幸を為在□□伏  
 罪江戸城平定の庶相立以処を以 御先冥へ 為告

屯集暴  
 威を張り  
 抗官軍に  
 趣相闘へ  
 此後の動  
 靜に依り

以 思召に付 山陵に参拜に 仰出以去會津其  
 外残黨の者尚處々直ちハ山親征をも可為遊以石  
 公卿列藩益勉勵敵愾の氣不相弛急度可相心得旨  
 山沙汰の事

閏四月

一内外大勢を為 知食海陸軍の山作興より列藩の  
 山指揮海外各国の山扱等其當を為得以否とハ山  
 興隆の致処殊々地勢の利不利ハ関係の最大ある義  
 又付弥以山勵精山誠誓又を為基以後屢浪花に 行  
 幸官代をを為置万機山親裁内外の大勢山勢取を為

遠近所司

三十

遊は 敵慮の旨は 仰出は 付上下厚く奉戴し各  
其分を可<sub>つ</sub>尽<sub>つ</sub> 山沙汰の事

但今般は 仰出は 通京都の先つ二条城と<sub>は</sub>為<sub>は</sub>定<sub>は</sub>  
一山宗廟の地旁以来別して山警衛向厚く<sub>は</sub> 仰出  
は浪花の俊の屢 行幸は為遊は 付て下民の困  
苦<sub>は</sub>為<sub>は</sub>厭 行在所官代等追て地利山撰ひ山造管<sub>は</sub>  
為在は 旨は 仰出は 事

閏四月

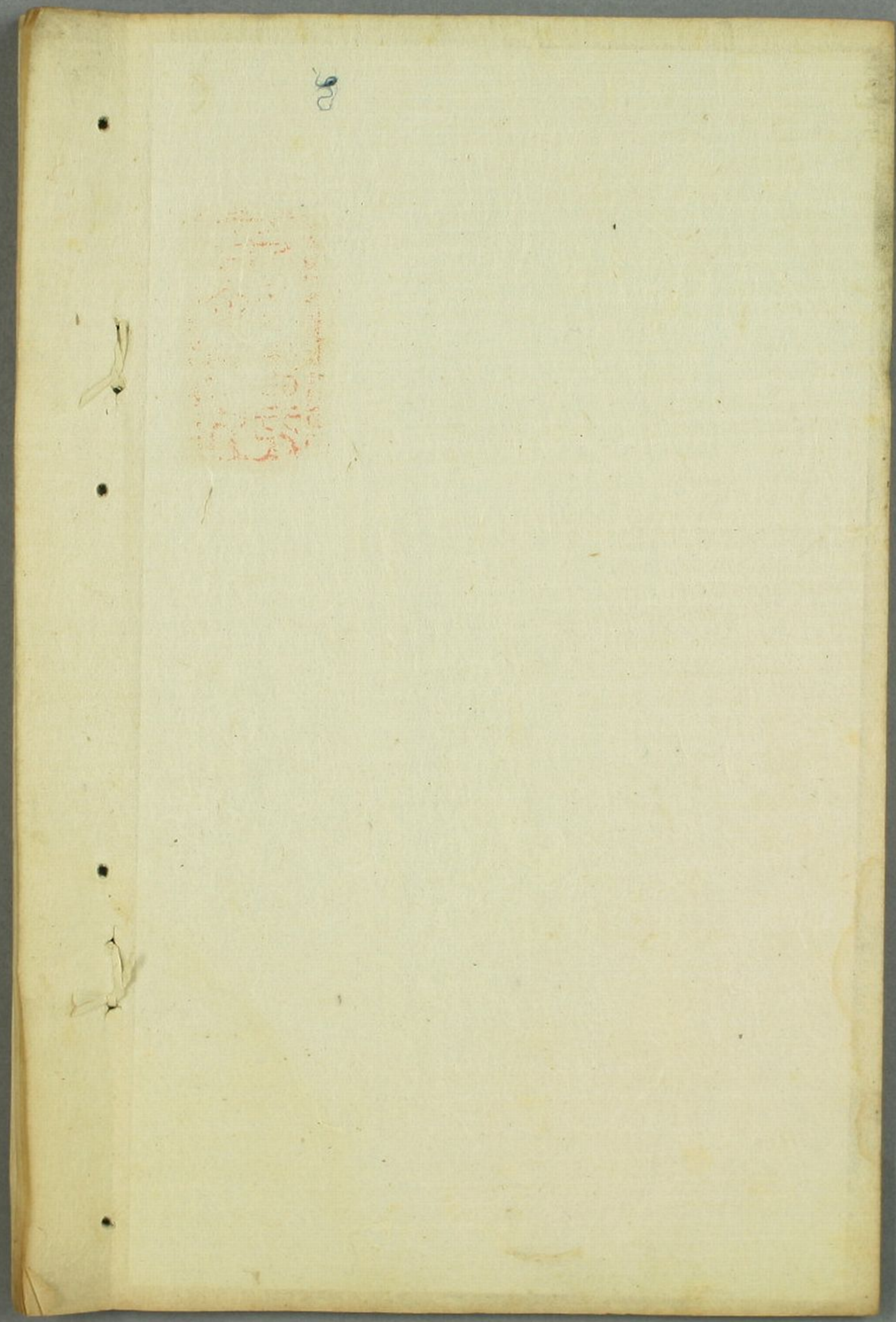
○横濱より帰り人の話

支那の廣東は動乱有り近日も戦争に至るべき摸

松の由

仏蘭西より軍艦一艘兵士乗込で入津を右に日本今  
日の形勢は付横濱の地并は外国人警衛の為めあり  
且水曜日毎は波登場より仏蘭西病院及び本  
町一丁目仏蘭西にニストル館の前はかみ音<sub>は</sub>奏<sub>は</sub>  
奏を是は非常の時を用ゆる合図の音楽を前以て諸  
外国人は示しあり故に此音楽を奏する時外国  
人其場は集りて心得のよき皆聴聞を<sub>は</sub>と<sub>は</sub>  
是迄横濱在留仏蘭西にニストル<sub>は</sub>役<sub>は</sub>リオン口セス<sub>は</sub>人  
昇進して帰国を<sub>は</sub>き<sub>は</sub>たりて交代の<sub>は</sub>為<sub>は</sub>め<sub>は</sub>ニスト

ル同オントレノ名本國を發シ飛脚船ニテ西洋一千  
八百六十八年六月第七日日本國四月十七日横濱ニ  
着セリ右出迎トシテ歩兵二百人許騎兵六七人海岸  
ニ列シ口セスモ亦馬車ニ乗り與メ之を迎ふ午時頃  
オントレノ上陸を乃チ兵士列を整ヘ歩兵を後ニ退  
キ騎兵オントレノを護衛シテニストル館ニ入ル  
其美濃あると言語ニ尽シ難シトイフ  
肥前侯横濱を出立シ兵士の未ダ在苗のト



50